感謝される経験と感情経験の頻度および達成動機づけ

伊藤忠弘

(学習院大学)

キーワード: 感謝, 感情, 動機づけ

The relationships among experience of being appreciated, frequency of emotion experience, and achievement motivation

Tadahiro ITO

(Gakushuin University)

Key Words: Gratitude, Emotion, Motivation

目 的

感謝は他者から受け取った援助や思いやり行動に対して感じる感情である。互惠の利他行動の観点では、感謝感情は他者に対する返報的な援助行動を動機づけるという点で適応的な対人関係を促進する。さらに感謝を感じることは当人の心理的適応と関連していることも指摘されている。一方、自分の受けた援助行動に感謝を感じるか否かは、その行動をどのように認知するかによって左右される。援助が利己的な動機によってなされたと認知するなら、感謝感情は生起しないであろう。この援助に対する認知の仕方は、状況的な要因や個人差要因に影響を受けて、感謝の感じやすさを規定していると考えられる。一般に感謝感情の望ましい側面が指摘されているが、援助に対する返報的な行動を動機づけるという点を考慮するなら、感謝感情を負荷感や義務感と結びつけてアンビバレントに認知している人もいられるかもしれない。

これに対して、感謝されるという経験についての研究はあまり行われていない。感謝される経験も喜びや誇りなどの肯定的な感情と結びついており、例えばボランティア行動や他者志向的な達成行動を動機づける源泉となっていると考えられる。しかし感謝される経験自体、意図的ないし非意図的な他者に対する自らの援助行動が基になっている。このため感謝される経験の頻度の個人差は一層大きいことが予想される。また感謝感情と同様に、他者から感謝されることに對しても、肯定的に感じる程度(肯定的感情)、期待したり求めたりする程度(期待)、あるいは否定的側面を認知する程度で個人差があると考えられる。

本研究では、感謝される経験に対する認知や欲求の個人差を探索的に検討するために尺度を作成する。その上で先行研究(伊藤・平井, 2013)に基づいて以下の仮説を検討する。(1) 感謝感情の感じやすさと感謝される経験の頻度に関係がある、すなわち感謝を感じやすい人は、感謝される経験も多い、(2) 感謝されることに對する認知は他者志向的達成動機への態度と関連している、すなわち感謝されることを肯定的に認知し、その欲求の高い人は他者志向的達成動機づけに肯定的であり、否定的な側面を認知している人は他者志向的達成動機づけに懐疑的である。

方 法

研究参加者 大学生 122 名 (男性 53 名、女性 69 名)

質問紙 (1) 感謝される経験に対する認知を尋ねる尺度: 感謝される経験の頻度、肯定的感情、感謝されることへの期待、否定的側面の認知について 15 項目を 4 件法、(2) 情動経験を尋ねる尺度: 個別情動尺度より楽しさ、悲しさ、怒りに対応する項目を按群し、独自に作成した感謝感情の項目を加えて、各 3 項目ずつ計 12 項目を 5 件法、(3) 自己・他者志向的達成動機に対する態度尺度 25 項目を 4 件法で回答させた

手続き 授業時間の一部を用いて他の尺度を含めた質問冊子として配布、回収した。

結 果

感謝される経験に対する認知を尋ねる尺度に対して、最尤法プロマックス回転の因子分析を実施したところ、否定的側面の認知に関する項目は 1 つの因子を形成せず、最終的に 3 因子解を採用した(表 1)。

項 目	肯定感情	期待	頻度
7 人から感謝されると幸せな気持ちになる	.83		
8 人から感謝されるような仕事がしたい	.77		
15 私にとって人から感謝されることは喜びである	.73		
13 「ありがとう」と言われるとうれしい	.69		
3 おれを言われると、またその人を助けてあげたいという気持ちになる	.46		
10 親切にした相手から感謝の言葉や行動を期待する		.79	
5 人を助けておれを言われたいのがつらい		.79	
12 世話をした相手から感謝の言葉が聞かれなくても気にならない		-.81	
1 「ありがとう」と言ってくれる人が私のまわりにいる			.66
9 人から感謝されることが多い			.50
11 普段の生活で感謝されるような機会はない			-.69

この結果に基づいて下位尺度を構成した。肯定感情は頻度($r=.49$)と期待($r=.27$)と正の相関が認められたが、頻度と期待間の相関は有意でなかった($r=.19$)。さらに情動経験、達成動機への態度との相関係数を算出した(表 2)。他者から感謝される経験が多いと認知する人は、他者に対して感謝する経験も多いと報告していた($r=.50$)。また感謝されることに喜びを感じる人ほど感謝を感じやすかった($r=.46$)。また感謝される経験の多い人、感謝されることに喜びを感じる人は、「自分のため」よりも「周りの人のため」に達成行動に動機づけられており、さらには他者志向的達成動機を内面化して自己志向的達成動機と統合させていることが明らかにされた。

その一方で、感謝されることを期待し強く望んでいる人は怒り感情を感じやすく、他者志向的な達成行動を「自分のため」に行っているという懐疑的に認知しやすいことが示唆された。

	感謝	楽しさ	怒り	悲しさ	自己志向	他者志向	負担感	利己性	統合
肯定感情	.48	.36	.07	.10	-.29	.32	.09	.09	.55
期待	.03	.01	.32	.10	-.00	.04	.16	.23	.14
頻度	.50	.61	-.02	-.07	-.26	.32	.02	-.03	.44

考 察

感謝される経験の頻度や感謝されることに對する喜びの感じやすさが、感謝感情の感じやすさや他者志向的達成動機づけと関連しているという仮説は支持された。一方、感謝される経験に対するアンビバレントな認知は今回の研究では捉えることができなかった。感謝されることへの期待と怒りの感じやすさや他者志向的動機への態度との関連を含めて、感謝される経験に対する研究を多面的に進める必要がある。

引用文献

伊藤忠弘・平井花 (2013). 他者志向的達成動機と対人的感情経験の関連 日本心理学会第 77 回大会発表論文集